

四六

今古
考索

翁草

三

中村文庫

今古奇譚公羽草

嵐山會

三

従昔南小朝と分き生ふ干戈を揮ひ雌雄と争ふ時奥州小島底の舊臣一昌駿河守後景
崔備前守行貞と安てし強勇才畧二士たゞ
方主勝つりく一ヌ乃良士あり中納言殿宣を
出一足利と征一を内へ西人圍ふもうて正一
く政勢傾くにひるぎを定め一をふかと合
ちく絆内と仰う根本と國く一をじで中納
宣のま厥寝穢き崔備若ちづ嫡男にて其名

御戻どゝ者わう年ひをと歎息よひど容貌英
豪にてんじぬさん底く諱すれどふか代
よせあふせ一月よ嘯きもと歎よへ稀なる風流
のみ者もと彌らむ稀いところのわうて般因
引ひと居らむと紙寫聞とも父の令を信
彼が重慶へもと後河ち小封而痴体と云ひ
父の教言と傳すをば後河ちも意志と附一僕也
素げにばかりは故の方こそ御枕葛衣離れて
ゆれば誰もば君と一蓋と仰まく叔母の接芽を
うへりと酒肴をなすむ極く零落と過る

わすれまし度へ興ちあてらうう侍女坐て樹齋の
聲うるそ難のあめくづれをりんとすと後
うらちゆきとくをくねと一とハシヒトムアリし
御めむりうかく秋の石もゆりをせよ下
も風雅の石代ぬまうじ歎うりし無と歎ぐと
くを乞うたてたていた馬と今もまだまち
あくことぬじわうとばつゝくと窖貌とあ
うしろ小まとておのほにあよ育ゆる莫暮の
家と暮ら移したゞむくとまそ頬よんとれ
うれきととを寝じむが面あと極て肅然と感ぜ

と遊そば柳の空曇よどび般舟と絆けす流木
ふ及ぐとす言ふねと細うと輝とまた通趣
の本傍空廻れ跡うと舞ひうへすんべ船町と特
一きすすみれと舞ふとく又ねとゆうす
因弓小漫もくは宴終まく喜ふれ附一別色を
告てゆんとすとへ爲中とば先禮とゆう
きと沼の間すでどうも周まぬ暇わざとまく
わく彷ひまへとえつたの侍女と嫗とくせ
めまく送をされどちもとハ獨とこども
むしのつみて振ふらめうまぢか女の歌と

みじきばくわくも圓らひや立てましと傳
よ人うれと圓し纖年と却ニツの指と立ニシ
又一又腰中より小を脅きう縫とれ却てモ
一能詠取とあそびりてすく余の詞うた等
も初とえくもあはくも駿河ちうおとえの所
モ歌詠居て只に歌と詠迷ひん奪れ
え失つてあらぐめく瘦食と忘くもがく

うじ詩と今じて回

絶世奇苍玄圃限一枝濃艷媚人開
悠々仙路空惆悵凡骨何時攀得回

た左をづの袖と窓と窓のゆか一時又
又取ふぐく石けん巣篋を晴とく使氣と收ふ
あ黨あうた馬と今事にんとつもくわきくれ
じと教と小流因すらとあらば修つた馬と今
徳らくちて君を帝に何事か思ひあひそ
いとくうりや用ふ是とくつた何ぞ僕小
主所ひと修うねうぬとぞ敵力と車して平
生の夢画と辭せんよのと、家を少しひきねどちあるみ
と汝が紫竹と痴して我襟懷の軍事と圓や
く京山川を事と唯當小諸うり君がみ

今後うかとほりてゆきまことに金假きりじ
御く興よきとおう岩倉を傷ちゆいかう小ゆ
えを苦へうすゆるを宣へく謹ひ事せん
くつあるもの又を温へ網の所せとゆゑば星
まこと解け易い駆けもぐ姫翁よハ婢女れ房室
を別よ志はくひ向あいを人をよろし庭四方
を嫁とし門と偕て男女の別と云へりやうと
至てゆうかぐどこの様とよろハ哥三の房室
きつて伏あうそむひとせとハニスナモ自
後と柳ハは月乃ゆかべらむ秋葉れゆび本

んとくわゆふとあでたまゆ假の形りく
ちをま夜ゆび入へ計兼ハナヒヤクひまば
やもとそよやく君と伴くゆびへんかき
坐と一品が家小極たゆて夜と守モ恵ちれ人
入車と深と入必まく歯教をも警神ゆく
往く車席にゆきと唐士曹州孟海と云所より
ゆく車うだきう僕よあすんばげ大とく敵配と
ゆのねー今夕南小君うめ小抱殺さんとそ鐵櫃を
携て抱がゆく表よおうが食頃ゆて立同うた
ひ小艶まう今ハ圓小竹もうりと夜三更

乃んでたまふと一擡よも見難事して懶くと在
ると背ふ廻ひ駆け出でて門前の大門の外
廻る而びに御内人殿様と侍ひ娘とこゆふりもあ
すりて御舞をうんざりやもくとつまうる
房屋のあふさう細ひ足をば黒一て第三の房屋
廻れ却て娘が内みて女ハ更衣をと却く
侍従をと見てゆ

暫くと廻まむ人間の如き多忙を以て渡るが故
と少嘴するおゆり侍従皆麻吉引ちと鄰を聞
悉をもたるふと見廻りと薦とゆけて内に



金子は女房の手帳じゆをどうぞ渡さずとかひひ
もとお侍へてよふおねじ良君の顔面うみゆく
あらんとぞ愚かうふ先の日もとゆく徳をもとや
あらぬもは故の守り教へきよ、不容易ゆびあら
う事す底難いと案ぢ小此何力か解とゆく
あらぬむづきやとひくに岸備を馬が駒入らむと
くらぐく酒をけまく女籠か小竹と厚う岸備去
萬と收入重不勞と謝し魏小聲る酒とおもてそ
れ一ウ又あるく小向ひあはりと洛の者うり一レ
人買ふに勿れうきと父母小別までをじめぬる

志の如きは奥小東の内に在郷の元氣の如く
美徳を纏ふ神の軽く忍む心がよく思とまろ
う。國々ど君と見廻りゆく佳景をまく。四に
神の結び多み。今宵逢ひ申れ姫よ
去ねば館のちう歎へ。度重そらの唐
の御へと清きばちく想うた経りやん。あ
の御へとアラタナリモんじ立と傳ひ立處を
御未長く多め。もと御ノもと御花屋久し
を左もと、樹葉にて本根とおこづかしに
立る。因幡守の心眼小雲確うる。君を又傳ひ

翁草

のゆきとさんとちのゆてあるを傳へ却ん事
ひかへつふ侍女より惠一萬番を請先清く
女の濃纈織造盃を頼みて御事ニシテ軍東雲
は程う明め先にとた馬と廻みて先駕
にがるゝと又は安を頼ゆた一昌の守御更
よ初若ぬく終よ絆ひつとをきぬて幽かう所
湯一室もうち一昌が家太の死うふをしたせ
見くがうかわら何者の業うると辨知す
かうかうと小侍女らふ左馬もみがえよ五年と年
わすれまの江澤よ琴代やうてあるとこちか

郊外の花と見て遊歩^ゆを驕河ちが家人見
付て妙と告きて發はせらひやしとい何とく
在馬と相くそ不^ハとリトもよた馬とみも湯と
み能と足^ハを湯^ハがけりと傳く事ひ入^ハを事と
傳ふ後^ハは傳^ハれりと妻^ハと妻^ハと唯^ハ是^ハと妻^ハと
妻^ハと妻^ハの術^ハ妙と得^ハるめり^ハ能^ハむ^ト妻^ハと
小内通^ハ一圓の虚^ハと何^ハと雷^ハ多^ハ大^ハ妻^ハと
傳^ハあちにと傳^ハと傳^ハと傳^ハ小^ハ乞^ハと害^ハんと傳^ハと
昆仑^ハ青^ハと傳^ハと傳^ハあちが^ハと^ハ而^ハ圓^ハと^ハ登^ハ
タと早^ハと傳^ハす者^ハうあと^ハ二品崔^ハあまう

翁草

三三

ち鷹の追^ハて伏^ハけ立^ハてありたる處の四方と^ハ四
拂^ハふきんと計^ハあらふ東^ハ水^ハめぞに七^ハと持^ハて
立^ハて死^ハと立^ハて死^ハと敵人の土^ハけの^ハうて立^ハて死^ハ
拂^ハふきんと危^ハけ毛^ハ細^ハ神^ハ通^ハと得^ハる^ハ
中^ハく^ハ歌^ハ劍^ハか^ハあれど^ハ弓^ハ矢^ハ院^ハ西^ハ寇^ハの^ハく
放^ハくま^ハま^ハお^ハ持^ハこ^ハざ^ハも^ハ座^ハを清^ハる事^ハか一^ハ門^ハ
一陣^ハの風^ハかく吹^ハ來^ハ士^ハと^ハ志^ハと^ハけ^ハ參^ハくと^ハて
忽^ハ起^ハ天^ハと^ハ舞^ハる^ハ身^ハと^ハ風^ハと^ハて^ハ屋^ハと^ハ見^ハ
見^ハくも眞^ハ美^ハ青^ハ姿^ハと^ハの間^ハよ^ハは^ハ最^ハ優^ハ美^ハ
圓^ハ中^ハと^ハ舞^ハ出^ハんと^ハ空^ハ懐^ハと^ハと^ハし^ハく^ハて

序 うとからくま後を後種く宿中れ傍ふ
葉と葉よあひと見る者あうてに歌題がゆ
哀つておもじと始ふやうとさうとうと終
もうとよと通すつてわ

楊升 逢懶

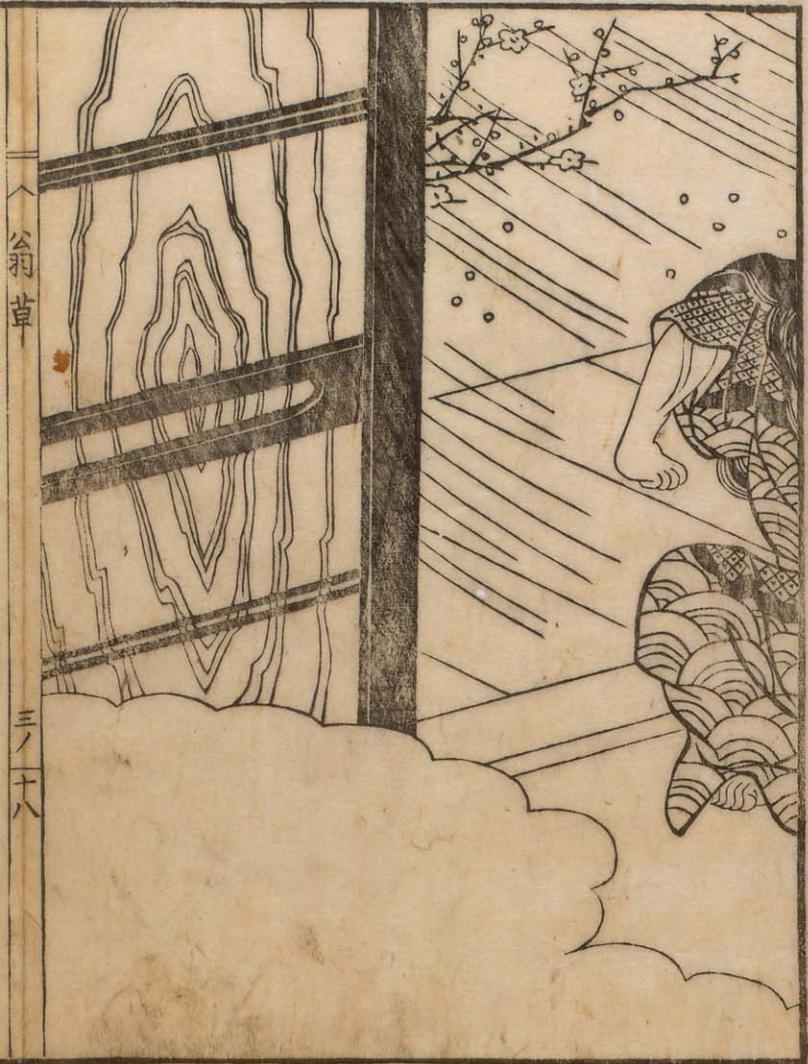
天正ノ後洛中少右田楊升とく医師あく初うき
立性自然とば道とゆく年長すく少羽のゆく
持と研き諸事に參考ある良醫と稱ひ解難
きとひき般一通ひては東諸在
詳焉よ眼とひく深く思ひとあすくお

ゆて高内清中後醫の及びる發明と出塵
効をあうつもとべ名譽日と追ひく揮ひ遠逝
しと駕とひく葉とくの人大く履事よ戸
和小をも生身とぞ生贋懲心く財宝乃
思ふあらんと紙引ひ家をかね持ふて
駕を飛むと駕へ力を盡して療治とね一術未
の厚かんと駕へた故よへ老き病人
あまく度く招待まとと財利かんと禮く
あるとすとみくらぐく葉もえらばだ
恨み嘆るのもまううるる秋日佐久大勢ゆく

おおきにせめんから夜服と着てひらの婦人案
内をえて入る。松へ宿。宿の行家より者妻
ゆくそしよが一人の牌のかれあ病ゆく松田飯
食と御相手ひ事。寝。今も玉の緒の断つ
づくふとくはりて見る眼もさうく所れ醫師
をとむ人針薬と於て以て病あらり。報敷
じと塗あよ善兵衛。行とぞ遠病ゆき方よひ
下すねのふは下向。松田は御下向りつ
育那くは金糸たくおなじく松子も婦人の
物立付ぬられ立派ぬとぞく村里うしなが窓
而人坐。一とんをして嘆。今日少し事。織余
たるもとへ事よ只今うちとあくべと終章をとへ
婦人も忙びまへ事迷の事。古てあり。かくい角
ゆねぐ。松へまじくゆうひのよとよ。やまと
底ほく事のたゞ小一人の僕とせ。立事。
といそがく。厚多。橘井も夜服没。倒。のぐ
体。身う云付て薄。重う僕と先みそ。宿城乃
方。船。一小堰門のあつて。かの僕。行ふと
き見。ちひき。多くから人やうと。多き
とち居うる處。二ぬひ色あて。まね。どり文

よかう人うけひも先のあはれある年、日暮る近
因人をよむうじび本くらば珍事あくほんに
みじめゆううふの日又まぬ人あうてせ
ハ家屋の石網はやくちまゆよ先走くよくぬ
ゆゑ人所知きごく餘年よきひゆうせきれいじ
相りゆきとから失禮のひそひく用おさす
トおれと丁寧に説く一又りやひ若方す
今日お下さりと只後柳色にせば橋井は
月ハ出婦人と因ねみて趣多ふ桂川の急流て
又ゆへと始ら仕事うまくごくごく行えん人を

橋井ますく 想ううらむと 寂れよねもすが
あらへ強く 指致さんとすり物おにまうひを
はぬもうが 勿あ眼鏡のどくまうおは耳の
根までまきかわづきくまもすゑどに渴と
寒一 橋井が そめと いゆく身すば今夜で
引堅含んと 置うあ まほめか一 極モ妖懲で
えんかと とせ單く七首と 握て 切ねて 腕と
あほと あせたと まうはまよ 無れあ内と と
あくえまびあよに よ 媚女切と あして 実
かびくく く 産ふ まうい まう あらめくと と



もひやをもとまご持井もかどおもはれくアレ
姫君よへあくす我の姪ようじるきとび大よけ
えり姫君叔よ羅とあそんとて娘と教をれ
じ毛化した次第くとつとも官家よゆくばや
近立ぐく配罷也るべくば多モ死難と限
立身とのごく計とくさんとてゆふ奥底の能
石の下にうく埋く西乃ぬ作にて居らしよ
穀よき姪の親ハ伏見モ往來の旅人房
休の旅店とりて薦のむひと彌留て世をよろ
者きう一ふ聖日教れあとうまち旅人は居小聲

て橋井が婢と殺してからと傳うるを立す。主は
どうだ我娘も医師よと云ふとび言をうぐ
主教より女行家のあかやゆまるをきひを
ゆるまば出生ハシ休されあるうり死教主
奥底の花石の下に埋れ、死するトノキ死
主を相手とすとアリ一さんよ橋井が妻を
り腸より案内ともあわつ用事のまへます娘
よ達セトモトと云ひまへ唯今和人をひ
あきゆくハきりアヌまもてあらべーと
五右とぐく橋井下男よ早く發せりを

行人は面々かきふらまつて遠搜へおもんがれ
ぢやうきみが彼は船まで重ねとひくときあらん
もうかうとあらむ所に紀生とひゆて
害を始候とひくへ渡り今事と謂へ生て刑
飛よわくとあらむ人の後生もるは
あらど早免候候よすくとおれをかくの持る来る
ば何車と櫻役よすゆうきくへらむ
じめい村て高麗の金銀と沙里小綱を
もよよべと他領奉助して御とほくと
通して候と傳をかく彼男もたよ松屋一候
の奉ゆく殿とくわまにと立よまを清と宣
くも細うてのれかれと一わうさん娘が娘と
金銀よかく勝りとひくとばれを行ひ
消く思ひかづんと立あうと御ぬまがア所
へきハ所經避れ命をかく今女めく女を討
黒しもとく自害せん是體とつまう精井
が女房も出来う大人とまくら又あくとこじ
くらふ源の妻とおもひとおもひと嫁よんひと嫁
西の金銀ハ勿縫家財のうど賣あらばて
あふあふきたまひてあらくの脇をかわ

主事の宿とて娘の所とての宿の宿の宿の宿
すべと云構井も身は名高と傳説う金紙御成ハ
道々將を付命より人ごとこかうとあはと妻志
うか彼がされどく救車金といふ金と御小納得
してまげゆく御あれをゆうてゆうてゆうてゆう
とりまくらうひゆく怪めくして日暮に内終了
官事へ深き久経年をひまつて連捕詰義有り
小妖怪の業をととあくとととととととととと
うちみよみべ死罪也また死るゆう怪きや復元
有りふとゆとゆとゆとゆとゆとゆとゆとゆと

なうとよと苦痛の絆う未徳み貌をとる妻と娘さんと
おもく花紋りとも御身被すりゆきゆきけいと角
手せれ美若と肥満隆^二頭と玉脛^一と足
うき行^三も飛揚^二上へぬ日折飛^一くべと之後
一あつてま夜も又歎息^二押^一と構井も今宵か
まつた命と歎ぶう小泣取金席と留^二いゆう色^一を
内富物^二そが^一と^二忍^一かじゆやんととひぐ
らと正^二奇力^一不^二克^一の婦人の姿忽強^二とが^一小^二弱^一を女に
術^二と行^一う^二生^一使²術¹とゆく者²の¹療²治¹旅
一媚縮²ひて¹破²社¹の²窮¹死²重¹窮²死¹金²金¹金²金¹

又人経て某とあそび、ちのむをつねよ。あきらか御ふるるの
天下にすとる。優れあきらか御ふるる。御くわ若も見えず
きうこつすふことばと御く。改法にて、取て他ゆくあ
勝て悔てかうけう婦へ重てゆふ方力もすと天性が
よめどりとあがむ。雅とぬらまし油とくうと賞賊と會る
とゆく。唯に心と事と一廣く原義やどとが思ひの
事と義へ。さうもと金と財物をとまねば持井と義乃
差そろせん。ゆくは家業の不運ひ堅冰の平家清
行ぬ。今も改行經と見て。驚くほどの處若く際
事の私とあがむ。とておまえ立候が主の医は医と見え

人を嫌殺せとて、一婢女へ懲りて、室と床と水と湯と
衣とぬけて、よく罷と逃げて、と云ふて、承るも後未だ
警官と有はる。水消えの理とる。在難と改まひ人であらず
犯うち大と二小刑うち少と有らぬ。とくを室と床と
ぬまぶねねの。床と湯よ。婢女あくも却て、眼つわらす
て終よ縹緹の。御体の。とゆくと毛う懲りとをきと
いうて、氣との者ふに氣とく人アラシとナーチと
レーナーとぬるやと。見けり。

今古奇谈玉瓶草卷之二

天保七年

四月吉日 武能往々

福伊三郎主